

物憂げな表情

悲しげな目

ユーゴスラビア・コソボ自治州のアルバニア系難民を救援している国際医療ボランティア団体・AMD A(本部岡山市)。その医療チームに倉敷市羽島、社員平松範子さん(30)が通信員として参加し、このほど帰国した。二十二日、コソボ紛争の犠牲者を目の当たりにした平松さんは「診療所に並ぶ物憂げな顔が今も生々しく思い出される」と語る。



平松範子さん

コソボ自治州のアルバニア系住民がユゴ軍などに面を脅かされ、約五十万人が難民としてアルバニアに難民として流入。AMD A医療チーム

は、第一次隊が四月四日にアルバニアに入り、現在第六次隊が難民の救援活動に当たっている。平松さんは、第四次隊の通信員として六月九日から

診療所で難民の惨状写す

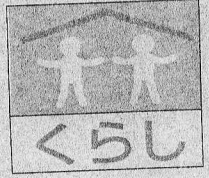
手りゅう弾で負傷、高熱の赤ん坊…

が死んでいる現場に出くわした。滞在中に「銃声かした」と日本人スタッフから何度も聞かされ、「治安が悪く、あらためて日本と違つ、身の危険を感じました」と平松さん。

医療チームは、デユラス郊外に一日、二カ所ずつ診療所を仮設した。難民は多い日で約六十人が列をなす。心身の疲労で胃腸を悪くした人、手りゅう弾で負傷した人、一週間歩きつめて足のつめが変形し肉に食い込んだ人…。皆物憂げな表情で無言だった。熱が下がらないという生後わずか三週間の赤ん坊が運れて来られた。故郷を追われた子ども。平松さんが医療チームに「アシアの人間にしかできない国際貢献をしたからだ。」「コソボでの」



たこともあった。一番の頭の中を占めているのは、自分たちの故郷にいつ帰れるのか、家は無事かという不安。この紛争犠牲者の「うらやま」、私が感じているものは何を伝えなければ、カメラで撮り続けました」と平松さんは語気を強める。



「きょうたいは何人?」「日本のどこから来たの?」「結婚してるの?」日本

人を見るのは珍しいのか、アルバニア系難民の手をもちながら、平松さんに次々と話しかけてきた。「君たちは、どこから来たの?」平松さんの質問に子ども

慮が足りない質問をした。民族対立は根深く、セルビと平松さんは後悔したといふ。アルバニア両民族は他